Ⅳ　特別寄稿

退職から半年

岩　城　英　夫

早いもので定年退職してから半年余が過ぎた。環境科学研究科の皆さんから暖かい送別の言葉を頂いたのが，はるか昔のような感じがする。

退職までの３ケ月はいろいろ忙しく，また寒さに弱いこともあって，多少身体に無理があったらしい。４月，退職直後の九州旅行の船中で目まいがし，活字を読むと気分が悪くなるという状態になった。それでも温泉に浸ったりしているうちに自然に回復し，20日間のドライブ旅行を無事終わることができた。九州では農山村がその土地の個性を生かした特産品つくりに努力していること，また昨年９月の台風によるスギ林の被害が予想以上にひどいことが心に残った。

旅行のあとはゆっくり過ごし，身体と目を休めるつもりであったが，帰宅直後に原稿の依頼があり，内外の植物生態学の創始者たちの伝記のようなものを書くことになった。そこで資料集めに図書館通いをしたり，久しぶりにドイツ語の本を読んだりで，ますます目を酷使することになった。面倒な作業ではあったが，19世紀から20世紀初めにかけての生物学者の生きざまがわかって面白かった。(例えば，日本に初めて植物生態学を導入し，「生態学」という言葉を作ったのは三好学であるが，彼の晩年の活動によって日本に天然記念物保護制度ができたこと，また在野の民俗学者であり菌類学者であった南方熊楠は，明治政府の神社統廃合による鎮守の森の破壊に身を張って抵抗したことなど)。

８月にフジモリ大統領が経済立直しとテロ対策に奮闘しているペルーにでかけた。リマ市では水道は８時間給水，電気は８時間停電。露店での売買で市民経済が維持されている状況は敗戦直後の日本を思い出させた。たまたま，大統領のスラム街視察に同行する機会を得た。住民の大部分は農村部から出てきたインディオや混血のメスティーソで，砂漠の中に草で編んだ粗末な小屋を建てて住んでいる。ジャンパー姿のフジモリ大統領は数千の群衆に囲まれて携帯マイクで演説をし，生活環境の改善を約束した。熱狂するスラムの住民の意外に小ザッパリした服装と，明るい表情が印象的であった。スリルに満ちた旅であったが，貴重な体験をした。

秋になっても原稿書きや講演などで相変わらず忙しく，“悠々自適”とはとてもいえない生活ぶりである。退職時には「これからはのんびり過ごす」などと言っていたのに，また来年から講義をすることになり，当分のんびりできそうにない。我ながら貧乏性だと思わざるを得ない。身体が続く限り，なにか仕事をしてゆくことになりそうである。環境科学会の編集担当理事の仕事もまだ続いていて，時々は筑波大学にも顔を出している。環境科学会も来年からはいよいよ法人化が実現することになった。また来年からは科学研究費の一般研究の複合領域に環境科学という分科ができ，環境動態解析，環境影響評価，環境保全という３つの細目に対し，研究費の申請が可能になった。多数の人が申請をして，環境科学の研究が一層発展することを願って，筆をおきたい。